

鞍掛山

畑田字鞍掛にある岩石質の林丘であって、その丘骨の露出部に立っている岩石を鞍掛岩と呼ぶことから、その地帯を鞍掛山と総称する。源平の昔、源將軍義家公東征の際、鞍をこの岩上に卸して乗馬を憩わせたところから名づけたと伝えられ、今尚蹄の跡が時に見え隠れするといわれている。その最も高いもの二丈八尺（八・五メートル）他の何れも丈余であって、まことに奇観を呈したのであるが、大半風化崩壊して僅かにそのおもかげを止めているのみである。矢沢神社縁起書に「軍用 調備屯白砂山以比義家公称鞍掛石」とあるので、以前は「白砂山」といったらしい。古い文献によると「……而して其巨巖の青松と相映帯する処、風光頗る明媚にして宛も小仙郷の観あり」と表現されており、小学校の遠足に必ず訪れた場であった。また詠み人知らず漢詩が残されている。

奇巖突 立崖端 伝借將軍懸玉鞍 今日猶看口碑外 蹄痕歴々
印頑磐

一つの課題―深渡戸字風越地内 鞍掛坂の道を挟んで畑田側の向い、ほぼ中央と思われるあたりに硬質の石がある。高さも鞍を卸すにはまことに格好、今の道路を掘り下げ前には鞍掛岩などと並立したものであろう。その前に石碑が倒れている。台石あり、本体の高さ一一〇センチメートル、中間中六センチメートル、厚さ一八センチメートル、刻字、中央上部に梵字、觀世音菩薩、右に白〇山、左に東堂山、馬頭とはないが東堂山の刻字から馬頭観

世音と考えられる。うら側の確認ができなかったので、建立年代等不明であるが、これこそ義家公が鞍を懸けた伝説に結びつかないか。大事な一字が磨滅して判読困難であるが、白砂山であれば一層興味深いことである。

一字一石の石碑について

經典の一字一字を小石一つ一つに写したもので、字数の多い長い經典となれば数万個の小石を必要とするもので、数ヶ月もかかる大事業であって貴重なものである。

畑田の長命寺境内にある一字一石は延享元年（一七四四）十月二十七日妙法蓮華經一部八巻を一字一石に写し、実如性信女靈位の即証菩提をとむろうためにつくられたもので、二四〇年後の今日まで一石毎に經典の一字一字をはっきり読み取ることができる。その石の量は依に四、五依におよぶ大量なもので三尺（一mほど）地下に一坪（三・三 m^2 ）範囲に埋められ、その上に石碑を建てたもので貴重な文化財である。

また、矢沢字田中地藏尊大仏の左方に建ててあるものは正面の刻字、奉書字蓮華經一字一石二部、うら、奉読大乘妙典二千六十部、右側奉大乘經典五百三十一部、左側、宝曆七丁丑（一七五七）天八月二十四日当所願主実道勝休とありまことに念入りな供養碑である。

これらの外同じ種類のものが矢沢字大池下五六の旧墓地、深渡